

一 南唐李昇所著李昇為名臣年百有餘
歲其書如下

名臣錄古事每世數言其始

與民。此其意也。

一 袁孝公曰南唐李昇所著李昇為名臣年百有餘
歲其書如下

一 袁孝公曰南唐李昇所著李昇為名臣年百有餘
歲其書如下

一 袁孝公曰南唐李昇所著李昇為名臣年百有餘

一 袁孝公曰南唐李昇所著李昇為名臣年百有餘
歲其書如下

もあつたから人の言ふ事も聞かぬ
昔の修しを今も守るは中絶あり
城の方へおれおれ多し新平の又
引多し

二七〇

二七〇番

一 佐藤孫右衛門内膳藤原経高の御子
二 佐藤孫右衛門内膳藤原経高の御子
三 佐藤孫右衛門内膳藤原経高の御子
四 佐藤孫右衛門内膳藤原経高の御子
五 佐藤孫右衛門内膳藤原経高の御子
六 佐藤孫右衛門内膳藤原経高の御子
七 佐藤孫右衛門内膳藤原経高の御子
八 佐藤孫右衛門内膳藤原経高の御子
九 佐藤孫右衛門内膳藤原経高の御子
十 佐藤孫右衛門内膳藤原経高の御子

一表世方古中多未字其及不若路一也三者
以机由空男力之取幼及之常年若及一也
其又由空下制一也三即一也

一表世方古中多未字其及不若路一也三者
一也三即一也

御名

一表世方古中多未字其及不若路一也三者

一也三即一也

一也三即一也

一也三即一也

一也三即一也

御名

一也三即一也

一也三即一也

御名

一也三即一也

一也三即一也

一也三即一也

一也三即一也

十八日

吉野

川内河内谷川等より吉野に到る
吉野の山は高き
此處より吉野の山は高き

吉野の山は高き

吉野

吉野の山は高き

吉野の山は高き

吉野の山は高き

吉野

吉野の山は高き

吉野の山は高き

吉野の山は高き

一 此書の序は権しゆの世に爲其書は書きたり
中より書きたり人五人也。

一 孝十七の年より一十の年まで

子科の年より又も記すは十の年まで

之の年より又も記すは十の年まで

尚ありて其の物に記すは十の年まで

一 其の年より十の年まで

一 其の年より十の年まで

一 其の年より十の年まで

一 其の年より十の年まで

力申すの事なりしは

立身成道の事なりしは

事なるは上より下なるは

下より上なるは

一 此の書は

同書なりしは

なるは

一 此の書は

此の書は

此の書は

お場さふらふお返り早人
あまふお助かしのや
了んおたふ

お掃屋かふるまふお掃屋か
お掃屋かふるまふお掃屋か
お掃屋かふるまふお掃屋か
お掃屋かふるまふお掃屋か

お掃屋かふるまふお掃屋か

お掃屋かふるまふお掃屋か
お掃屋かふるまふお掃屋か

お掃屋かふるまふお掃屋か
お掃屋かふるまふお掃屋か
お掃屋かふるまふお掃屋か
お掃屋かふるまふお掃屋か

お掃屋かふるまふお掃屋か

お掃屋かふるまふお掃屋か
お掃屋かふるまふお掃屋か

お掃屋かふるまふお掃屋か
お掃屋かふるまふお掃屋か

お掃屋かふるまふお掃屋か
お掃屋かふるまふお掃屋か

お掃屋かふるまふお掃屋か
お掃屋かふるまふお掃屋か

お掃屋か

一 如くしてしるる者たは、

一 如くしてしるる者たは、

一 如くしてしるる者たは、

一 如くしてしるる者たは、

一 如くしてしるる者たは、

一 如くしてしるる者たは、

出るる者

二日

廿六

一 如くしてしるる者たは、

一 如くしてしるる者たは、

一 如くしてしるる者たは、

一 如くしてしるる者たは、

一 如くしてしるる者たは、

一 如くしてしるる者たは、

一 如くしてしるる者たは、

去人子建之國表其出神心柱為能其通
書下中在之知也其表其大之知之國表
其出神心柱為能其通
其出神心柱為能其通

一 入之書之立也其出神心柱為能其通
其出神心柱為能其通
其出神心柱為能其通

其出神心柱為能其通
其出神心柱為能其通

其出神心柱為能其通
其出神心柱為能其通

一 出神心柱為能其通
其出神心柱為能其通

一 出神心柱為能其通
其出神心柱為能其通
其出神心柱為能其通

本万

上三書

一 依在座三帝言旨是也其言思也口口展成内也
是の中中事もあつた。

一 此書は乃致の書左帝名其財名也言言り列旨
織田信長は乃致の列旨は乃致の列旨は乃致の
老人列旨の列旨は乃致の列旨は乃致の列旨は乃致の
者のおい。

一 知事は乃致の列旨は乃致の列旨は乃致の列旨は乃致の

一 件 乃致の列旨は乃致の列旨は乃致の列旨は乃致の

乃致の列旨は乃致の列旨は乃致の列旨は乃致の

一 乃致の列旨は乃致の列旨は乃致の列旨は乃致の

乃致の列旨は乃致の列旨は乃致の列旨は乃致の

一 乃致の列旨は乃致の列旨は乃致の列旨は乃致の

乃致の列旨は乃致の列旨は乃致の列旨は乃致の

乃致の列旨は乃致の列旨は乃致の列旨は乃致の

乃致の列旨は乃致の列旨は乃致の列旨は乃致の

市言

二言

一 川流の月出るるを望むる者あり

望むる者あり

一 此言より所見三十五句の句意を尋ねる

と云ふ句の別を以て人の心を多岐に引く事あるを
此別を以て示す人も多し

一 昔言を以て其の長きを以て知る人も多し

一 用ひて其の世に於て其の別を以て其の科を以て

定むる人も多し其の別を以て其の科を以て

定むる人も多し其の科を以て其の科を以て

定むる人も多し其の科を以て其の科を以て

一 序

一 此言の意を以て其の科を以て

一 此言の意を以て其の科を以て

此書は、
● 一、
● 二、
● 三、

三三〇

甚平多

一、

二、

三、

四、

五、

六、

七、

八、

九、

印成後 印局中 一收一寄
之為而年一收一寄
印成後 印局中 一收一寄
印成後 印局中 一收一寄

一之目致在後其帝印成後一收一寄
印成後 印局中 一收一寄
印成後 印局中 一收一寄
印成後 印局中 一收一寄

印成後 印局中 一收一寄
印成後 印局中 一收一寄
印成後 印局中 一收一寄

印成後 印局中 一收一寄
印成後 印局中 一收一寄
印成後 印局中 一收一寄
印成後 印局中 一收一寄
印成後 印局中 一收一寄

此處之文字... 乃... 中... 上...

二

一 貴十三... 宗...

田... 白... 古... 了... 出...

書

一 相... 一 山... 一 想...

日及過重也... 故中及... 經本...
 不吉... 故... 故...
 一... 故...
 一... 故...
 一... 故...

古四日

桂月

一 中... 故...
 一 故...
 一 故...
 一 故...
 一 故...
 一 故...

一 少り好福は裁しゆ 川崎と申
番 善作を 在昌と入 割物の人未
しゆりとも割物未か 高人の言中 中 中 中
おん

古く

部

一 佐々木吉市 口角と建 言と申 金言
前 小言と申 言
一 此知らしは 梓 小言 言 言
一 此知らしは 言 言 言
一 此知らしは 言 言 言
一 此知らしは 言 言 言
一 此知らしは 言 言 言
一 此知らしは 言 言 言
一 此知らしは 言 言 言

古くは藤原の古伝書に、遠藤藤原
八幡山塚に因りて古伝書に藤原
の古伝書に因りて古伝書に

一 古伝書に因りて古伝書に

一 古伝書に因りて古伝書に

一 古伝書に因りて古伝書に

一 古伝書に因りて古伝書に

一 古伝書に因りて古伝書に

一 古伝書に因りて古伝書に

一 古伝書に因りて古伝書に

一 古伝書に因りて古伝書に

一 古伝書に因りて古伝書に

一 古伝書に因りて古伝書に

一 古伝書に因りて古伝書に

一 古伝書に因りて古伝書に

一 古伝書に因りて古伝書に

一 古伝書に因りて古伝書に

一 古伝書に因りて古伝書に

一 古伝書に因りて古伝書に

古伝書に因りて古伝書に

書は生るるの事徳に本は也
の事なり

一 是等の中はたゞ一途に非ざるも其の事あり
何れも是なりとて別れざるも其の事あり
やして本は教の中にも其の事あり
今も是なりとて別れざるも其の事あり
りん方なりとて別れざるも其の事あり
是れも是なりとて別れざるも其の事あり
是れも是なりとて別れざるも其の事あり
りん方なりとて別れざるも其の事あり

一 是れも是なりとて別れざるも其の事あり
是れも是なりとて別れざるも其の事あり

一 中は濁る清水を柱の如くは州山松溪松島福島の松島
田中孝院を著す三人割切三人事角其の事あり
其の事ありとて別れざるも其の事あり

一、
一、
一、

此の口

是なり

一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、
一、

國守五ノ部

毎日

二二五

一 川内文田日記 乙丑巳月迄迄内記

巳年刻系名在在也

一 此有馬の御祖身之古事記の御抄信長御書目

在在馬の御祖身之古事記の御抄信長御書目

在在馬の御祖身之古事記

一 御書目之御祖身之古事記

一 御書目之御祖身之古事記

御書目

一 御書目之御祖身之古事記

橋屋のり 竹多徳亭 在りて三人 到物
いん 寺のやがて 女列 寺の寺の景
中の方の 寺の寺の

一七 寺の寺の 寺の寺の 寺の寺の 寺の寺の
寺の寺の 寺の寺の

室

13

8

料

上越教育大学附属図書館



F81192359